

### 「帆を上げよ、高く」について その③ なぜ5拍子なのか？

尾崎 徹

『春愁のサーカス』という言葉が5拍子のリズムを刻んでいるという解釈も確かに一理ある。私は、5拍子が、みなづきみのり氏が持っている福永陽一郎の一つのイメージ（象徴）ではないかと思う。

5拍子の曲は19世紀以前にはほとんど存在しなかったが、20世紀に入り、クラシックで、映画音楽で、ジャズで、ちょっと変わったリズムとして注目され始めた。チャイコフスキー「悲愴」第2楽章／スパイ大作戦のテーマ／ホルスト「惑星」火星／ジャズ「テイクファイブ」など。「悲愴」とそれ以外の5拍子はリズムの取り方に違いはあるものの<sup>i</sup>、どの曲も受けるインパクトは他の拍子に比べかなり強い、と同時に、ちょっと取っ付きにくく近寄りがたい感もある。ホルストは『火星』を見知らぬ不気味な遠い存在として表すために5拍子を用いたというし、「テイクファイブ」はトルコの今まで体験したことのない不思議な音楽に触発されて作られたと言われている。普段4拍子や3拍子に慣れている私たち、特に演奏する側にとっては難物ではある。

みなづきみのり氏にとって、福永氏は捉えどころのない遠くて大きい存在、すべてを吸収したいと思うが、なかなかそれが叶わないもどかしい存在。そんな作詞者の思うにまかせない気持ちだが、作曲者・信長氏には5拍子という道化師にも似た少し歪んだリズムに通じるように映ったのではないだろうか。

5拍子は2曲目の「春愁のサーカス」に現れるが、その伏線は1曲目に既に現れている。それは「風を知れ」「時を読め」の5音の言葉に集約されていて、特に練習番号G(P20～P21)の全音音階が連なる部分では、アルトとベースが「風を知れ」をまず5回、そして半音上げてさらに5回、最後にベースから始まる「風を知れ」でピラミッド的に5回積み重ねられている。これらの言葉は福永氏がその晩年に、みなづきみのり氏に「飛び立つために、駆け廻るために、風を知り、時を読みなさい」と語っているふうにも読み取れる。信長氏は5拍子や5音の言葉、それらの5回の反復によって福永氏にそのように語らせたのではないか。

尊敬はすれど、近寄りがたくもどかしい存在、それが5拍子というぎこちないビートに投影されて、バランスを取りながら、畏敬の念を表すに適した構成がこの曲集に詰まっている。作詞者、作曲者が意気投合し完成した見事な作品である。

2018/06/03

---

<sup>i</sup> チャイコフスキー交響曲第6番「悲愴」第2楽章は[2+3]であるのに対し、その他の殆どの5拍子の曲は「3+2」つまり3拍子+2拍子からなっていて、概して前者の方は音楽がスムーズに流れ、後者はややぎこちないビートが残る。